2022年1月28日
日刊建設工業新聞

建築へ Vers Une Architecture

大学で建築を学びアトリエか組織の設計事務所、またはゼネコン設計部へ。実務を身に付け独立したり学生時代に事務所を立ち上げたりと、建築家への道はさまざま。総合資格学院（岸隆司学院長）が10日に東京都内で特別講演会（2021年度合格祝賀会記念）を開催。「学生時代～現在／手掛けた作品について」をテーマに、中川エリカ氏（中川エリカ建築設計事務所）、古澤大輔氏（リライト＿D、日本大学准教授）の2人が講演した。

総合資格学院主催

学生時代～現在の作品テーマに講演

中川 エリカ氏

なかがわ・えりか
1983年東京都生まれ。2005年横浜国立大学建設学科建築学コース卒、07年東京芸術大学大学院修了。オンデザイン勤務を経て、14年中川エリカ建築設計事務所設立。東京芸大や横浜国大、法政大学などで非常勤講師を務める。

建築設計を学ぶ過程や、実務のさまざまな場面で面白いことに出会う。面白いとは知らないこととの出会い。知らないこと、面白いことに出会い続けているから建築設計を続けている。

大学では北山（恒）先生と出会い、たくさんの薫陶を受けた。中でも建築は敷地内で完結するのではなく、敷地以上の広がり、どこまで影響を及ぼすのかを考えながら設計することを教わった。敷地の周辺も模型にして、建築が街や環境とどう連続していくか、その街らしさをどうすれば立体化できるか議論し、設計していくことを学んだ。

広範囲に建築を捉えるため模型を上から見る癖が付いていたが、大学院で指導を受けた六角（鬼丈）先生からは、人間のためにつくる建築だから目線のレベルで設計することを教わった。模型もさまざまな方向からのぞけて体感できるものをつくる。躯体だけでなく、そこで起こる出来事も含めて模型にすることをたたき込まれた。

西田（司）さんが代表を務めるオンデザインでは大きな模型と出会った。初めて担当した「ヨコハマアパートメント」（横浜市西区）のプレゼンテーションで30分の1の模型をつくった。大きな模型は瞬時に大勢の「分かる」を生み出すと実感した。初めてのプロジェクトだったので建築がモノとして建ち現れる衝撃、感動は今でも忘れられない。

独立に当たって、大きな模型でなければ設計できない建築を目指すことを決めた。そのきっかけは独立直後のキューバ旅行。キューバ人が自由に、自走的に目の前の空間を使うことに衝撃を受けた。人々が自由で開放的に動いている美しさへの渇望とうっぷんが爆発し独立後、初の住宅をつくったようなプロセスを大切にしている。当たり前を疑ってみる方が新しい建築ができると考えている。

当たり前疑い新しい建築つくる

静的で完結した集合ではなく、バラバラで開放的な集合に興味がある。もともと「バラバラ」や「雑多さ」などに興味があったのかもしれないが、いろんなプロジェクトと出会い、建築設計の経験を積み、より強化された。数学の証明のような答えに向かっていくというより、理科の実験のような取りあえずやってみようというプロセスを大切にしている。当たり前を疑ってみる方が新しい建築ができると考えている。

古澤 大輔氏

ふるさわ・だいすけ
1976年東京都生まれ。2000年東京都立大学工学部建築学科卒、02年都立大大学院修了。同年に馬場兼伸、黒川泰孝両氏とメジロスタジオ設立、13年リライト＿Dに組織改編。同年日本大学理工学部建築学科助教、20年日大准教授。

学部2年生の時に坂倉準三の事務所でアルバイトを始め、4年生までの3年間、一つのプロジェクトの模型製作に携われた。現場事務所で職人にディテールを説明する模型づくりのため現場を経験した。そこで建築は人がつくるという当たり前の事実に触れ、衝撃を受けた。建築は徹底的に具体的で、徹底的に抽象的であるという二つの側面、「建築の両義性」に目覚めた。

4年生で坂倉事務所出身の藤木（隆男）先生の研究室に入った。大学院に進み、藤木先生の後任となる小泉（雅生）先生の研究室に所属した。藤木先生は無口で背中を見て覚えろという人、小泉先生は徹底的に開いた議論をする人。対局の両先生に学ぶことができた。

小泉研究室の助手にオンデザインの西田さんがいた。小泉先生は24歳、西田さんは23歳で事務所を立ち上げている。2人から卒業後に独立することを勧められ、違う大学で仲の良かったパートナー2人と「メジロスタジオ」を始めた。ひたすら親族に営業しつつ、実施設計図書をトレースして勉強する日々だった。

初めての建築の仕事は住宅「高松町ガレージ」（東京都立川市）で鉄骨造を選んだ。鉄骨のイロハも知らなかったので毎日現場に通い、どういう人がどんな作業をしているか、すべて記録した。当たり前のことをかみしめるような経験をした。2作目の木造別荘「白州山荘」（山梨県北杜市）の現場で建築家として生きていこうと決心した。

30歳のころ今後どうやって建築をつくっていけばいいのかと、これまでの活動を振り返りながら自分の活動の方向性を模索していた。メジロスタジオも10年がたち、リライト＿Dに組織を改編した。ポイントはハード（建築）とソフト（仕掛け）を両輪として活動すること。それぞれの専門領域を横断させ、社会の多様なテーマに応答していく。

組織改編のタイミングで大学に研究室を持った。研究テーマは「転用建築論」。正しい方向から少し離れ、翻って事後的に豊かさが立ち現れるような「ダイバージョン」（転用）のメカニズムを研究している。一つの世界に特定するのではなく、矛盾している二つの世界が互いを肯定し合う。こうした両義性の中から建築を考えていきたい。

両義性の中から建築を考える